

来賓挨拶

高知女子大学学長 成 田 十次郎

ただいまご紹介をいただきました成田でございます。この4月に郷里である高知に帰ってまいりました。まだ、時間もあまりたっておりませんので、大学や看護学科、あるいはこれからの看護学部、大学院ということにつきまして、十分理解をしているわけではございませんが、今日はお招きをいただきまして、大変光栄に思っております。女子大における看護学の将来につきまして、少しだけ私の感想を述べさせていただきたいと思っております。先ほど会長さんの方からお話がありましたように、日本で看護学科というものを4年制大学に設置する、つまり、本格的な大学で研究と教育の対象として、看護というものを取り上げたのは、本学が最初であるという話をお伺いいたしました。私は、女子大に着任してこの事実を知りまして、正直大変驚いております。私が中学に入学した年に、女子大の前身であります女子医専が発足をして、1年生が佐川の女学校で入学式をあげたとお聞きしております。それ以来、私は女子医専、女子専門学校、そして女子大に対しまして、少しだけ情報を持っておりました。しかし、日本で初めての看護の研究教育の大学であるということは、大変失礼ではありますが存じませんでした。先輩の方々は、「初めて」というように簡単な言葉で謙遜して申し上げておられますが、これは歴史的に重要なこととございまして、日本で高知が最初の地であるということを知りたくて私は、女子大学に帰ってきて、看護学科に強く興味を覚えておりました。つまり、日本の看護学というものの発展に、今後どういうふうに関わっていくかということになるわけでございます。大学に帰りまして、看護学の先生方とお会いしているうちに、その歴史というものをひしひしと感じております。歴史は、あるいは、継続は力と申しますが、この先、日本全体の看護の学科、あるいは看護大学をつくる上で、本学の看護学というものが強い力を持っておると思っております。ところで私の方では、看護の学問というものは、非常に実践的な学問で、広い体系というものをもっているというふうに思っております。それだけに、看護は学問というからには、これまでの既存の学問の方法論による知識だけではなく、なんといっても、看護の学問独自の知識の領域というものを開拓しなければいけない、そうでなければ、学問というものが、独自の学問とは認められないと思っております。ですから、皆さんの先輩、あるいは皆さん方は、随分苦勞して、看護の学問を独自に創ってこられたと思っております。大変敬意を表します。しかし、現在、看護は非常に脚光を浴びておりますがゆえに、看護の学問を研究教育していくということは、非常に困難な問題があろうかと思っております。全般に、知識の体系というものを創ることは、これは並々ならぬこととありますが、しかも現在のように、世界がどんどん変化していく、こういう時代には、現代社会が看護に求める課題を研究し、その成果をとりわけ知識の体系にまで創り上げていくことは、大変な作業でございます。しかし、今日、この会場にこのようにたくさんの方々、しかも卒業生だけでなくこんなにも多くの皆さんがお集まりになっていて、小学校の段階から、大学まで、あるいは社会の様々な職域等におけまして看護の課題に取り組んでおられるということを知りたくて、大変力強く感じております。先ほど申しましたように、看護学科は、平成10年4月には、非常に広い学問体系を持った看護学部昇格し、大学院修士課程もできます。我々にとりまして、大変嬉しいことで、多様な研究教育が保証されるわけですが、さらに博士課程が誕生する可能性があるわけで、マスターと同時にドクターをも是非にと思っております。女子大と看護学部、それに大学院が出来ましたら、しっかりした知識の体系を皆さんによって創っていただきたいと思っております。最後に学会を22回にわたって続けてこられた役員の方々に心から敬意を表しますとともに、日本の看護の学問が今後共に、高知県から創られていくという伝統を守って育てていただきたいというお願いと期待を込めまして、ご挨拶にかえさせていただきます。